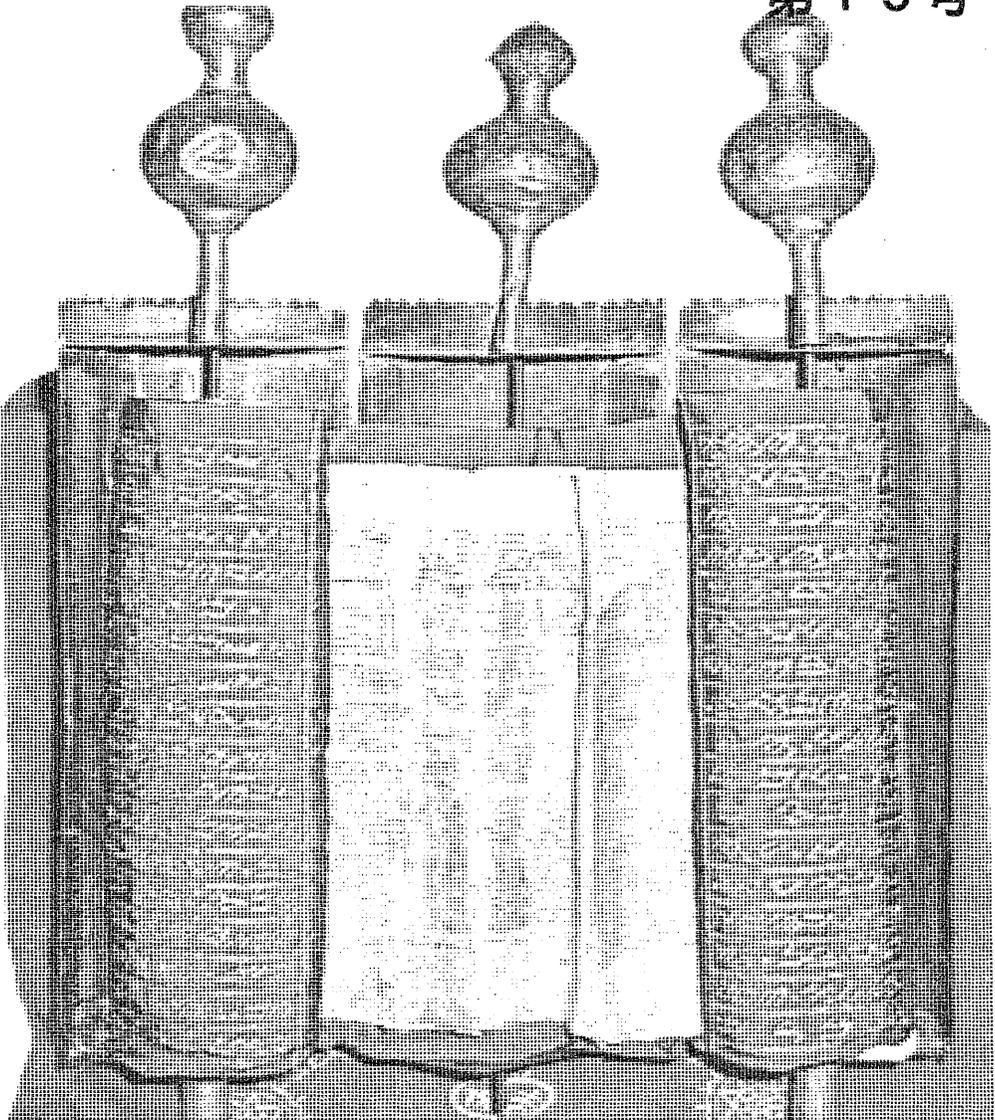


Anchor

アンカー

1994年12月

第15号



特集

- 聖書翻訳の流れ
どの聖書を選べばよいか？
- 別冊：新共同訳に対する意見書

アンカーの読者の皆様：

長らくお待たせしました。皆様にはご迷惑をおかけしました。5月に八重岳に引越、いろいろなことで忙しく、アンカーの出版が遅れました。あきらめているわけではありません。主のゆるしのうちに今後がんばっていきます。お祈り下さい。

第15号は聖書の翻訳についての特集号です。今日多くの聖書訳が出るようになっていきます。特に英語では驚くほどです。ありがたいことではありますが、気を付けなければならないこともあります。我が教団でも新共同訳を安息日学校で用いることが決議されているようですが、公的に用いられることに対する危惧を感じますので、その理由を別冊で書きました。しかし、個人でいろいろな訳をそろえて比較研究することは有益だと思います。

この度は、ジョー・クルズーラジオ伝道牧師の出版する AMAZING FACTS誌に載っていた記事をお届けします。これは、聖書の翻訳でどれを選ぶべきかという問題に大きな助けを与えようと思われま。

別冊では、沖縄で幾人かの者が集まって合意を得た、教団の決議に対する意見書をお送りします。

最後の真の教会は「神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ち続ける聖徒」と表現されています。

「イエスを信じる信仰」は欽定訳では「**イエスの信仰**」となっています。イエスの信仰は純粹でありました。神のみ言葉に徹頭徹尾従っていたからです。「神の口から出る一つ一つの言葉によって生き」られたのです。144、000がイエスの信仰を持つと言われているのは深い意味があるのではないのでしょうか？彼らは使徒時代以来目撃したことのない信仰のリバイバルの復興という経験にあずかるのです。というのは純粹な神のみ言葉に徹頭徹尾従うからです。彼らもみ言葉の一つ一つを大事にする者たちです。ワールド派の流れの信仰を持つ者たちです。

「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」(ローマ10:17)。純粹な信仰は純粹な神のみ言葉に基づいているとするなら、できるだけ純粹な神のみ言葉が保たれている聖書を選ぶべきではないのでしょうか？

144、000が「女に触れたことのない者で純潔な者である」と表現されています。黙示録で純潔な女(黙示録12)と淫婦(黙示録17)は、清い教会と墮落した教会を象徴しています。これらはライバルです。黙示録17章の女は「大淫婦」と呼ばれ、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべき者らとの母」と言われています。「ぶどう酒」、すなわち偽りの教えと政策を「あらゆる国民に」飲ませる、すなわち働きかけるのです。

今や、大いなるバビロンの母、バチカンとその娘たち、プロテスタント諸教会の「再一致」運動が熟する時に来ました。エキュメニカル運動と言います。「新共同訳聖書」はその一環であるとするなら、その「共同事業」を我々はどう見たらいいのでしょうか？

更に新しい聖書は再臨信仰の土台に抵触してはいないでしょうか？この際、我々はもう一度、再臨信仰の土台が築かれていったステップを再吟味する必要があります。再臨信仰の土台とは、すなわちダニエル8：14です。我々は牧師に頼らず、1844年にキリストは天の至聖所に入られたことを聖書のみで説明できるでしょうか？ダニエル9：25～27から2300日の預言を説明できるでしょうか？あがないは十字架で終わったと信じている他教派の人々にSDA独特の「最後のあがない」の教理を説明できるでしょうか？我々の主キリストは、今、どこで何をしておられるのかを聖書で説明できるでしょうか？天の聖所で大祭司として仲保の働きをしておられることはどのクリスチャンも知っているはずですが、私が言っているのはそれ以上のことを説明できるかということです。もしできなければ、我々はセブンスデー・アドベンチストとしての立場を確保することはできません。バビロンと呼ばれている一般キリスト教会との区別がつかなくなり、SDAとしての立場を失ってしまいます。（大争闘下巻222参照）。

我々は土台から揺さぶられる時代に住んでいます。実に厳粛なことです。「無関心」であってよいのでしょうか？預言者は「知的なクリスチャンになれ」と言っています。それは何も頭でっかちの、口先だけの、「魂の至聖所に真理が入ら」ない、観念だけの信仰を意味しているものではありません。聖書は「正しく研究されるなら、これほど知力を強める書物は外にない」と言われています。我々は救いにいたる知恵には賢くならなければなりません。

「救いは真理の知識によらない、イエス・キリストを信じることによるのだ」との発言をよく聞きます。それは確かです。しかし、それは現代の真理を知的に知る必要を否定することではないはずですが、人が滅びるのはなぜでしょうか？「彼らが滅びるのは、自分らの救いとなるべき真理に対する愛を受け入れなかった報いである」（第二テサロニケ2：10）。十字架のイエスを信じてさえいれば救われるという考えは、現代の真理に無関心で、無知であることをゆるすのでしょうか？

「世俗と妥協する精神と、われわれの運命を決定する現代の真理に対する無関心とが、すべてのキリスト教国のプロテスタント諸教会内で力を得ている」（同上92）。

各時代、神はその時代に特別な真理を送られました。それを「現代の真理」と言います。それを「拒否」したり、それに対して「故意に無知で、軽率」でいても、イエス様を信じてさえいれば救われるのでしょうか？

「神があわれみのうちにお与えになった警告を拒否して無事ではあり得ない。．．．彼らの救いは、彼らがその使命をどう受けるかにかかっていた」（同上148～149）。

まもなく「圧倒すべき、驚くべき事件」が激しく、徹底的に我々の信仰を揺さぶります。いやもうそれはすでに始まっているのです。このわずかに残されている恩恵期間に、SDAとしての立場を自分で説明できるようにしておきましょう。

「聖所と調査審判の問題は、神の民によってはっきりと理解されねばならない。すべての者は、自分たちの大いなる大祭司、キリストの立場と働きについて、自分で知っている必要がある。もしなければ、この時代に

あつて必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画されている立場を占めることもできなくなる」(同上222)。

さもなければ、我々にどんなことが起こるのでしょうか？

「嵐が迫ってくる時、第三天使の使命を信じると公言しながら、真理に従って清められていなかった多くの者が、その信仰 (position=立場) 棄てて反対の側に加わる」(大争闘下巻378)。

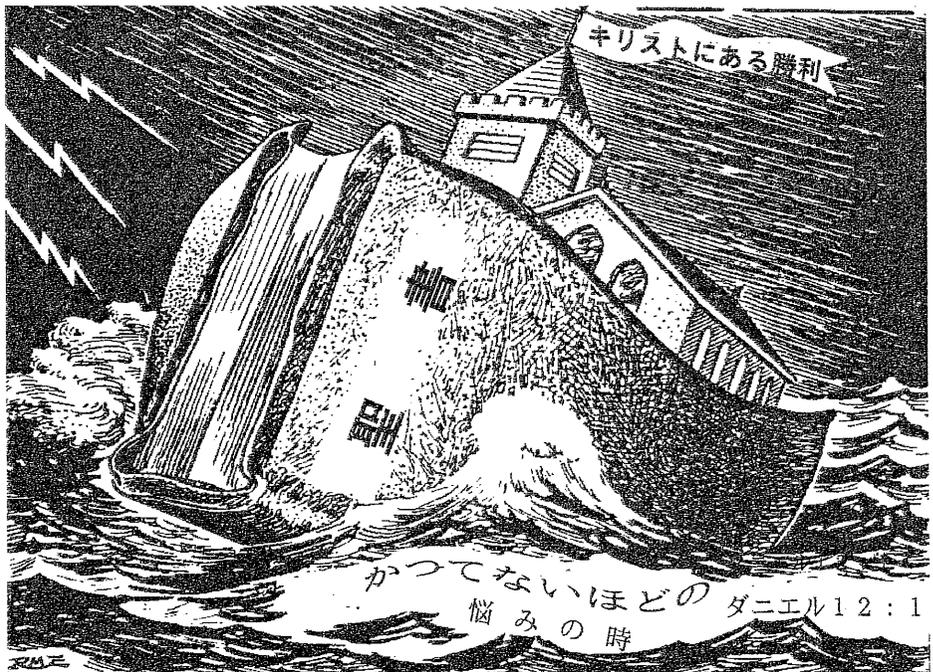
「彼らの真の立場を確かめることについて唯一のたのみは、天の聖所に彼らのこころを向けた光りであった」(同上149)。

新共同訳聖書でSDAの立場を説明できるか、頭を白紙にもどして試みて下さい。

「今日、信仰を告白する幾千の人たちは、牧師からそう教えられたということ以外には、自分の信じる信仰の要点について理由を説明することができない」(同上363)。

「神の変わることのない生ける御言」(Iペテロ1:23)は各時代、忠実なご自分の民によって守られてきました。ワルド派の人々、宗教改革、再臨運動へなどのようにバトンタッチされてきたかを記事を通して見て下さい。クルーズの記事は新共同訳を判断するのによい助けとなるでしょう。「すべてのものを識別して、良いものを守り」(Iテサ5:21)続けたいものです。

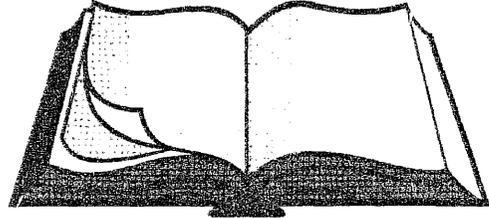
年末に、もう一度、世紀末のことを考え、再臨信仰の遺産を確かめたいものです。アンカー(錨)を天の至聖所にしっかりおろしましょう。



忠実な証人

さまざまな聖書訳—どの訳が一番いいのだろうか？

「AMAZING FACTS」ジョー・クルーズ
ラジオ伝道ニュース・レターより



聖書のどの訳を使うべきかと迷ったことはないだろうか。今日氾濫しているあらゆる聖書の翻訳の中で、ある一つの聖書翻訳が一番いいということはあるだろうか。もしあるとすれば、どのようにそれを他のものから識別出来るであろうか。

たった数世代のうちに英語だけで、何百という聖書の翻訳が出版されている。300年以上もの間、KJV（欽定訳）だけがプロテスタント諸教会で使われていた聖書であった。しかし、近年は多くの現代訳が受け入れられるようになってきたのである。最も人気を集めている訳を幾つか挙げると、RV（改訳）、T（現代訳）、N（新英語聖書）、JB（エルサレム聖書）、N（新アメリカ標準訳）、N（新国際訳）などである。

聖書訳を選ぶのはなかなか面倒なことである。推薦されるのは宗派によって大きく違う。翻訳のほとんどはもっとも優れた古代の写本をもとにした学問的訳であると自称するのである。これらの古代写本や翻訳に用いられた方法などについて教育を受けていない人（探求者）はギリシャ語やヘブル語の学者にでもならなければ一番いい訳を探すことは出来ないのではという気持ちにされる。あげくのはてに、ほとんどの人はただ外観がきれいな方を取るのである。

我々の信仰の基礎として、聖書はすべての誠実なクリスチャンの生き方を大きく影響する。神は、我々が確信を持って聖書の訳を選ぶために大学の学位を要求なさない。だからといって自分の単なる好みによる選択も頼りにならない。今日我々に正確に神の言葉を伝えてくれる最も優れた一つの翻訳が存在する。それをつぎとめるにはみ言葉自体の導きを求めるべきである。

ほとんどの翻訳には、靈感による神のみ言葉の描写を見出すことが出来るのである。み言葉自体の標準にもっとも添っている訳が我々の選ぶべき聖書である。

最初の靈感によるみ言葉の特徴は、第二テモテ3：16にある。「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え（教理）、戒め、正しくし、義に導くのに有益である」と記されている。これからすると、聖書の一つの特徴として、それは人生における純粋な教え（教理）と導きを与えてくれるということがはっきりしている。それは人間の先入観や教えによって汚され、歪められていないものである。

二つ目の特徴は、ローマ書10：17に見られる。「信仰は聞くことによるので

あり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」。靈感の言葉は我々の信仰を確立し、強める。それは我々の堅固な土台であり、まじめに研究するとき、我々の神とみ言葉に対する信頼は成長する。

我々の救いは「... 信仰によるのである」（エペソ 2 : 8）から、み言葉が我々の救いそのものに直接影響を及ぼすのは明らかである。第二テモテ 3 : 15 に聖書は「キリスト・イエスに対する信仰によって救いに至る知恵を、あなたに与えうる書物である」と教えてくれているのである。

聖書の訳を選ぶ際に、それは疑いを引き起こしたり、混乱を広めるものであってはならない。「神は無秩序（欽定訳では混乱）の神ではない（第二コリント 14 : 33）。むしろ、神は「信仰の導きでありまたその完成者」（ヘブル 12 : 2）である。そして神の言葉も我々の信仰を確立するものであることを覚えていなければならない。

三つ目の決定的な特徴は第一ペテロ 1 : 23 に提示されている。聖書は「神の変わることはない（欽定訳にはとこしえの）生ける神のみ言葉」である。それは神の靈感によって与えられ、一世代に限られず、全世代のために保たれてきたのである。そのうえ、み言葉は静した（人類から隠され、人々に影響を及ぼすことのできない無力な）書物ではなかった。それどころか、いつも目に見え、確信を与え、生きた言葉としてキリストの教会の一部であった。暗黒時代でさえ、み言葉は失われてはいなかった。

黙示録 11 : 3、4 には法王至上権の 1260 年の間でも二人の証人、つまり旧約と新約聖書は力強く証をしたと記されているのである。イエスやパウロもみ言葉を戸惑いなく幾度も自由に引用することによってその正確性を立証したのである。彼らは一度も神の言葉が信用できず又失われている、またはそうなると警告していない。「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」（マタイ 24 : 35 ; 13 : 31 ; ルカ 21 : 330）。詩篇 12 : 6、7 は次のように述べている：「主の言葉は清き言葉である。... 主よ、それを保ち、この世代からとこしえまでに守られるであろう」（欽定訳）。み言葉は神によって我々の世代に至るまで保たれてきたのである。そしてあなたが研究する聖書訳もそのようなものでなければならない。それはキリストの教会における生きた存在として摂理によって各時代守られてきた歴史があるべきである。

まとめてとして、使う聖書は次の三つの聖書的テストに合格すべきである：

1. それは人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。
2. それは混乱や疑いを起こさず、信仰を確立するものである。
3. その言葉はキリストの教会における生きた存在として神によって各時代守られてきたものである。

これらの特徴をみ言葉から立証したところでこれをそれぞれの聖書の訳を評価する基準にすることができるのである。

これらの特徴をみ言葉から立証したところでこれをそれぞれの聖書の訳を評価する基準にすることができるのである。

第一の特徴によるとすべて意識された聖書は不合格である。リビング・バイブルのような意識は多かれ少なかれ訳者個人の信条が流れている聖書の解釈に過ぎない。例えば、リビング・バイブルを研究してみると、人の死後の状態に関する聖句の表現が明らかに訳者ケネス・テイラー自身の教理が表れていて聖書的でないことが分かる。フィリップス翻訳はリビング・バイブルより学問的ではあるが、自由に意識されているため、教理の研究には適していない。その他教理を研究するとき用いるべきでない聖書といえばある宗派や特別擁護団体（あることがらに関して主張を同じくする団体）が出しているものである。この手の訳はほとんどの場合、偏見が含まれている。エホバの証人のNEW WORLD TRANSLATION や中立の立場をとったプロテスタント聖句集 (LECTIONARY) 等がその一例である。

しかし研究用として一般に使われている RSV, NEB, TEV, NASB や JB のような訳はどうだろうか？ 神の言葉の第一の基準に当てはまるだろうか？

これらの訳を欽定訳と比較すれば、それらは欽定訳で教えられているどの教理も全く否定しているわけではない。しかし、何力所かを変えて、大事な教理を弱めているのである。特に大きな害を受けている教理はキリストの神性である。この教理を立証する聖句を全部変えているわけではないが、どの訳をとってもキリストの神性を確立するほとんどの聖句をひどく弱めているのである（第一テモテ 3 : 16、エペソ 3 : 9、またローマ 14 : 10、12 を RSV, NEB, NASB, TEV, NIV と JB で参照。また使徒行伝 20 : 28 とローマ 9 : 5 を RSV, NEB と TEV で参照）。

最近、わたしは熱心そうな聖書研究生の若者たちに会った。彼らの聖書研究会に出席した際、驚いたことに彼らはキリストの神性を否定していたのであった。その証拠として彼らは最近の聖書訳を提示したのである。欽定訳と人気を集めているこれらの研究用聖書の間には何らかの相違があるといっても言い過ぎではないと思うのである。これはさておいて、聖書を選ぶ第二のテストを見ることにする。

神の言葉の第二の特徴は、我々の信仰を確立するということである。まず欽定訳を吟味してみよう。300年もの間欽定訳 (KJV) だけが人々 (アメリカ) の父祖、清教徒たちの信仰を大きく左右したものであった。KJV が決定的、かつ唯一の権威であった。牧師は KJV から力強く説教し、信徒はそれを熱心に覚えたのである。疑いもなく、これを研究したすべての者の信仰を確立したと言えるであろう。現在、人気ある他の訳はどうだろうか？ KJV と同様に我々の神と神の言葉に対する信仰を増すものであろうか？

答えとして、いくつか例を見ることにする。どの現代訳でルカ 4 : 8 を見ても、イエスが荒野で誘惑を受けた時の「サタンよ、退け」という命令が記録されていない。省略されたと示す何のしるしもない。同じように、イエスが言われた「罪人への悔い改めの呼びかけ (マルコ 2 : 17 と マタイ 9 : 13) や主の祈りの最後の句がどこへか消えているのである。

また更に見ると、これら現代の訳には他にも問題が出てくるのである。RSV, NIV, とNEBでルカ23:34を見るとそこに「父よ、彼らをおゆるし下さい。彼らは何をしているのか、分からずにいるからです」というイエスの言葉はある古い写本によると省略されていると脚注に記されている。読者は直ちに「イエスはほんとうにこれを語られたのだろうか」と疑いがわいてくるであろう。学者が疑うくらいなら自分もそうすべきではないかと思えてくるのである。悲しくもこれは遠い昔に起こってきたことの特徴を持っている。創世記3:1には「ほんとうに神が言われたのですか」というサタンが人類に投げかけた最初の言葉が記されている。彼の最初の働きは神の言葉に疑いを投げかけることであった。彼の言わんとすることは「神はほんとうにそれを言われたのだろうか？み言葉は真剣に信じるに値するものなのだろうか？」ということである。現代のいろんな訳をKJVと比較してみると、200箇所以上にわたり省略または注解によって(KJV)の聖句の信憑性に疑問が投げかけられている。この中で最も著しいのがヨハネ7:53~8:11(姦淫で捕まえられた女の記録)とマルコ16:9~20(イエスが昇天される前に現れ、また昇天されたというマルコの記録)である。

ある人々は、このような省略や注解は大したことはないというであろう。確かにこれらの変化によって聖句の大きな意味は変わらないであろうけれど、聖書の約5%に影響しているのである。わたしはある時、ヨハネの福音書がまるごと抜けていた聖書を買ったことがあった。これは聖書のたった3%が抜けているだけだからいいではないか、他の福音書がこれを補ってくれるだろう、などと考えることもできた。しかしわたしは直ちに取り替えてもらった。あなたも同じようにしないだろうか？み言葉は一部でも削られるにはあまりにも尊過ぎるものである。

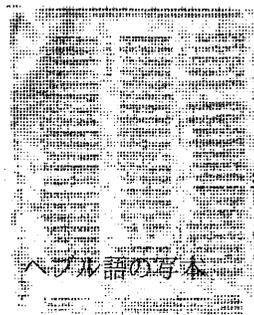
これらの省略の理由は後ほど見ることにする。まず考慮したいことはこの省略が読者に及ぼす影響である。間違いなくその聖句(自体)に疑いを投げかけるだけでなく、今はまだ発見されていないだけで他の箇所も省略されたり、変えられたりはしないだろうかという不安を植え付ける可能性が大いにある。あまりにも変化の対象となるために、人々は聖書の權威に関して不信を抱くようになる。

このような現象が今日見られるだろうか？確かに、他のどの時代にもまして人々がみ言葉を軽く取り扱う傾向が見られる。牧師はみ言葉から説かず、代わりに聖書の大まかな「メッセージ」について哲学的説教をするのである。そして信徒はめったに聖句を適用しようもしない。現代の訳がこの怠慢さの唯一の原因ではないかもしれないが、貢献していることは確かである。

これらの現代訳がプロテスタント主義に及ぼすに影響を認識して、カトリックの「ダブリン・レビュー」、1881年7月号に次のような驚くべき非難が載せられていた。

「『聖書のみ』の原則は偽りであることが証明されている。

〔カトリック〕教会が聖書の靈感の証人であり、その完全無欠さの保護者であり、またその意味の解説者であり、〔カトリック〕教会なくては聖書は無力であることがついに明らかになった」。まさかこれが我々の信じるところではないと思うが、もし聖書に対する信仰が失われたなら(破壊されたなら)プロテスタント主義がどこに行き着くかが指摘されている。



信仰を確立するどころか、今日のさまざまな訳は混乱と疑いを生み出している。人の信仰を難破させるかどうかは別として、確かに言えることは、これらの訳によって多くの者が羅針盤に対して疑念を抱くように導かれるということである。

第三番目の聖書の特徴が最も特筆すべきものである。それによると、我々が選ぶ聖書はキリストの教会における生きた存在として神によって各時代守られてきたものでなければならない。この話に入る前にまず、少し背景を知る必要がある。

聖書テキスト（底本）の歴史を調べる際、これらの原文はその当時の共通語で書かれていたことを知っておかなければならない。基本的に旧約聖書はヘブル語で書かれており、新約聖書はギリシャ語で書かれた。

靈感を受けた著者たちの手書きの聖書（つまり原文）はもはや存在しないのである。最初の著者たちの記録された言葉の証拠（証人）として残っているのは写しの写し（写本）である。これらの写本を見比べると多くの違いがみられる。



司会写本の発見

ほとんどの違いは、ミス・スペリング（書き違い）や他に明らかな間違いである。しかし何千という他の違いをよく吟味しなければならない。聖書を原語（ギリシャ語）または他の言葉で再現するときは、学者はすべての写本の相違を考慮したうえでどれが正しいかを決めなければならないのである。この大事業をやりやすくするために学者たちは写本をそれぞれのテキストタイプ（底本群）に分けているのである。つまり、似ている写本をそれぞれグループに分類しているのである。最も大事な旧約聖書のテキスト・タイプがマソラ本文（底本）である。死海写本（巻物）が発見されてからは、このマソラ本文＝テキスト・タイプが最も正確であると一般的に認められている。しかし、新約聖書の一番優れているテキスト・タイプについては大論争のもととなってきた。過去100年にわたって2種類のテキスト・タイプについて論争がくり広げられてきた。一つは公認本文でありもう一つはクリティカル・テキスト＝批評本文（近代批評学にもとづくものだから）という。

欽定訳は公認本文に分類されている写本をもとにして訳されている。RSV, TEV, NEB, NASBやNIVのような現代訳は批評本文の写本に強く影響されているのである。訳は元になる写本以上によくなることはない。一番いい聖書の訳を探すためには、我々はこの相反する二つの底本（本文）を吟味しなければならない。ここで我々は聖書テストの三つ目の特徴を当てはめることができる。最善の聖書訳は、キリストの教会における生きた存在として各時代守られてきた底本（本文）に基づいているべきである。

批評本文は、それを取り入れている聖書訳数のものすごさから分かるように、過去100年にわたって広く好評を得ているのである。その人気は驚きである。なぜなら、批評本文を支持するギリシャ語写本の数是非常に少ないからである。現在ある約5,000のギリシャ語写本のうち、ほんの一握り（ほとんどの場合、10以下）だけがこの底本に属する。しかし、他の5,000の写本よりはるかに価値があると多くの学者たちに評価を受けている二つのぬきんでた写本がある。それはシナイ写本とパチカン写本と呼ばれ、原文（オリジナル）から200年あまりしか離れていないのである。

シナイ写本は1844年にシナイ山のふもとにある聖カタリーナ修道院を訪問中のコンスタンチン・テイシェンドルフ氏によって発見された。彼は焼かれる寸前の写本48枚がぐず篋に入っているのを見つけたのである。数年後に彼は修道院から残りの写本を手に入れ、1862年までに全写本を発行したのである。

パチカン写本はシナイ写本ほど劇的ではない。法王ニコラス5世が1448年にそれをパチカンに持ってきたのである。何百年もの間、ローマ・カトリック教会は能力のあるプロテスタントの学者に時間をかけてこれを研究することを許可しなかったほど、この写本を厳重に監視していた。この写本をみることを許された人には、紙やインクを持ち込まないよう身体検査を行ったのである。それでももしあまり注意深く見ているようであれば二人の付き添い（監視）人が直ちに写本を取りに上げるのであった。しかし、1866年にパチカンはついに監視の下で、コンスタンチン・テイシェンドルフに写本を写す許可を与えたのである。1867年になって彼はこれを初めて発行したのである。

この古い写本は当時使われていた公認本文と違うテキスト・タイプ（底本郡）であることに気付いたテイシェンドルフ氏は歓喜した。彼の努力によって1500年間も失われていた神の言葉をようやく人類に取り戻あげたのだと、彼は信じたのであった。明らかに、このシナイとパチカン写本をもとに聖書を訳した現代の学者たちを含む、多くの人も彼と同じ確信を持っている。しかし、これらの写本のテキスト・タイプは（底本郡）は聖書のテストに合格するだろうか？

テイシェンドルフの時代、新約聖書は約1700年間生存してきたのである。だが批評本文はそのうちの1500年間は失われていたのであった。もしこの批評本文がほんとうの新約聖書のテキスト・タイプ（底本）であるとしたら、神は新約聖書を書かせてから後88%の間人類からそれを隠されたことになる。この思想は神の言葉の特徴とは妙に合わないようである。真のみ言葉は各時代に渡り神の教会の中であって生きた存在であった。それは失われて、ある日突然くず篋の中やパチカンの忘れられた棚のうえから発見されるようなものでは決してないはずである。



写本家

このテキスト・タイプは神の言葉を常に正確に代表するという聖書の標準に満たないばかりか、正確に写すという点でも学問的標準に満たないのである。テキスト・タイプ中のわずかな相違は普通としても、批評本文の中の違いははなはだしいものである。シナイ写本とパチカン写本は4つの福音書だけ見ても3,000以上も互いに合わない。平均すれば福音書の各節に相違点があることになる。（もしあなたが福音書を手で移したなら、3,000回も間違いを犯しただろうか？）

疑いもなくこれらの写本は写本家の不注意さが表れている。パチカン写本は何カ所も同じ言葉、または文を2回続けて書いてしまっている場所があり、明らかに監修されていないことが分かる。シナイ写本の写本家は写している際、折々行を飛ばしたりしている。あまりにもあからさまな間違いがあったために、この写本が使用されていた時代に10人の人たちが見かねて訂正の注解を加えている。これらの写本の誤りを認める代わりに、学者たちは加えられた注解などを各時代の聖書訳にそのまま本文として、または注解として取り入れている。ほとんどの場合、シナイ写本とパチカン写本だけを証拠として先に述べたような200箇所以上の省略がなされているのである。

何年にも渡り、この批評本文が原文（オリジナル）の聖書記者たちの純粹、または中立的（公平）な立場を代表していると盲目的に思われていたのである。しかし最近の学識が確認したところ、原文を元に校訂して写本が書かれたのではなく、ただ4世紀にエジプトのアレキサンドリアで最も権威あるテキストを元にしたのであった。そのため、批評本文は公式に「アレキサンドリア本文」として知られている。

オリジナルの、もともとの写本を決して持ったことのないエジプトで純粹なテキストが保たれたということは信頼するに値するだろうか。アレキサンドリアの歴史、特にこれらの写本が書かれたと信じられる時代を見ると、いろいろあらわになってくる。国際的商業とギリシャ文化の中心であったアレキサンドリアは哲学の学校で広く知られていた。クリスチャンの「思想家」たちは、ギリシャ哲学を聖書を理解し適用する道具と考えた。そして回りの異邦人たちのように、彼らは知的生活の中心と刺激となる学校をもうけたのである。学校の指導者たちは普通ギリシャ哲学の専門家であり、アレキサンドリアにいるクリスチャンの神学を大きく影響したのであった。

アリウス派の論争の中心はキリストの性質であった。アリウス説の信奉者たちはキリストは創造された被造物であると主張した反面、当時の保守派たちはキリストは永遠のお方で、創造されたのではなく、父なる神と同等であると教えた。60年以上も論争は猛烈に続いた。一つの側が勝つように見えたら急に反対側が勢力を増すのであった。

コンスタンチン帝



オリゲン



ユージェビウス



紀元320年に論争が始まった時、異教とキリスト教をごっちゃに混ぜたコンスタンチンが皇帝であった。純粹な宗教よりも政治に興味を持っていた彼は、彼に一番有利な側を支持した。コンスタンチンは初めにアリウス派の指導者たちを追放したが3年後の紀元328に彼らの帰りを歓迎しただけでなく、その一人を彼の個人的顧問に任命した。

このアリウス説の急激な高まりの時に、バチカンとシナイ写本が作成されたと信じられているのである。数人の有名な学者たちは、バチカンとシナイ写本はコンスタンチンが紀元331に命令した50冊の聖書中2つであると信じている。バチカンとシナイ写本両方も有能な書家らによって上等皮紙に書かれている。これはコンスタンチン皇帝に命令された通りであった。これは高価な事業計画であった。1冊の聖書につき、600頭のレイヨウ（鹿？）の皮を必要とした。

コンスタンチンは聖書の編纂（材料を集めて書物の内容を作り上げること）をカイザリアのユーセビウスにまかせた。オリゲンの熱心な支持者、また崇拜者としてよく知られていたユーセビウスは、アリウス信奉者たちを支持する傾向があった。このような人がこれらの写本を作る責任者であったから批評本文、そして今日のいろいろな訳も、キリストの神性をはっきり支持していないのは不思議でない。更に、もしユーセビウスが彼の尊敬した師（オリゲン）の批判的「記述」を真似たとすれば、彼も聖書を構成するつもりで聖句を分析した可能性も大いにある。それが批評本文の省略などの理由の一つかもしれない。写本の他の明らかな不注意な省略の原因は、コンスタンチンがこの仕事を終わらせるのに非常に急を要した命令のためでもあったかもしれない。何度もコンスタンチンは、ユーセビウスに全速力でこの事業を押し進めるようにと促した。校正はお金がかかるだけでなく、時間もかかるのでそう多くはしなかったであろう。

言うまでもなく、バチカンとシナイ写本はアレキサンドリアの哲学の学校の影響を受けたようである。ユーセビウス方の誤った批評家たち、またはアレキサンドリアが生み出した多くの異端者らの一人によってか、いずれにせよみ言葉を「正そう」とする試みは失敗に終わる。おそらくその墮落した信用できない性質のために200年以内にこのテキスト・タイプは不信用を招き、ついに廃れてしまったのである。

興味深いことに、バチカンとシナイ写本のいくつかの省略や異文はかつてはローマ・カトリック聖書にしかなかったものであった。ワシントン・ミッショナリー・カレッジの元学長で歴史博士のベンジャミン・G・ウイキンソン氏の考えによると、オリゲンとユーセビウスの崇拜者であったヒエロニムスがこの二人の誤りをラテン語・ヴルガタに導入したのである。このラテン・ヴルガタは何世紀も前からカトリックの公認聖書であった。英語のレーンズードーエイ訳はこれから訳されたのである。歴史は、カトリック教会がラテン・ヴルガタを受け入れないすべてのものに対して行った暴力の血なまぐさい話で満ちている。彼らの聖書を否定する者は教会が自ら称している権威を否定することであった。以前はカトリックの聖書にしかなかった異文や省略が現代のさまざまな聖書訳に出始めた時、ニューヨークの聖アン教会のトーマス・S・プレストン氏が次のように述べたのである：

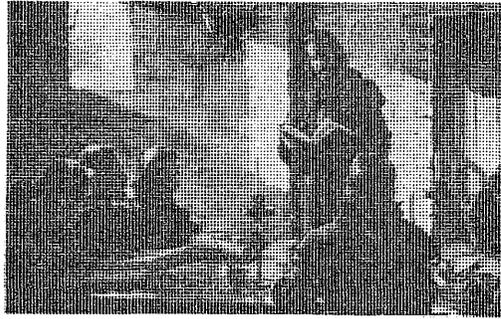
「多くの場合、彼ら〔他の訳者〕がカトリック訳を取り入れていることに関して、我々は満足を感じるのである。彼らの学識によって我々の聖書〔カトリック〕の正確さを確証しているのである」（Worfield's Book of Opinions）。

要約して、批評本文が保持しているいくつかの訳文以外、このテキスト（本文）は1500年間ずっと眠っていたのである。更に批評本文は4世紀のアレキサンドリアで主要な見解であったアリウス説を反映し、誤った校訂（編集）と不注意な写しによる数多くの省略が見られるのである。

逆に、公認本文の歴史は全く違う。批評本文を支持する少数のギリシャ語写本と違って、公認本文はギリシャ語写本の80%～90%を占めているのである。これは約4,000もの証人に値する！何百年にわたり、点々と現れたこれらの「証人」はさまざまな国からきている—ギリシャ、コンスタンチノーブル、小アジア、パレスチナ、シリア、アレキサンドリア、アフリカの他の国々、また言うまでもな

くシシリ、南イタリア、ゴール、イギリスとアイルランド。これは批評本文の限られた狭い場所と時間の範囲とは対照的である。

公認本文を支持するギリシャ語写本は紀元400年以前のものではないが、このテキスト・タイプがギリシャ語写本におけるこれほど顕著な位置を占めるには、ずっと以前から存在していなければならなかったであろうとほとんどの学者たちは同意している。実際、公認本文の初期頃の存在と使用は、最も古い聖書訳と初期の教父たちが引用した聖書を見れば明らかである。



ワルド派

「彼らは混ぜ物のない真理を持っており、
そのために、特に憎しみと迫害を受けた」大争闘上巻65

注意深く研究すれば、シリアン教会、北イタリアのワルド派教会、南フランスのゴリック教会、スコットランドとアイルランドのセルチック教会などの教会において公認本文が権威ある聖書として認められ、またギリシャ正教会の公認聖書の底本（本文）でもあった。

暗黒時代の間、背教によってキリスト教は打ちのめされたように見えた。しかし、神はご自分のみ言葉がとこしえに変わることのない生ける言葉として存在するために、選ばれた人々にそれを託したのであった。真の教会が荒野に逃れていったとき、（黙示録12：6、14）誤謬を振り払って聖書、聖書のみによりすがったのである。

これらの忠実な信者たちの中でもよく知られていたのがワルデンセス（ワルド派）教徒であった。彼らは紀元157年のラテン語訳公認本文を持っていたのである。彼らは証人として旅を続けながら、彼らの大切な手書きで写した聖書を一部づつそっと配布したのであった。

ギリシャ語とその文学が再び研究されるようになった時、ヨーロッパは死からよみがえったかのように1,000年の暗黒から目覚めたのであった。その結果、研究のリバイバルが起こり、神は歴史上最も力強い改革運動の土台を築きあげるためにある人を立てられた。エラスムスは10時間の仕事を1時間でこなせると言うほど優れた知性に恵まれていたのであった。彼の非凡な学識はヨーロッパ中を驚かせた。大英博物館の図書目録の10欄は彼が翻訳したか、編集または注釈した作品名で埋まっている。それに加え、彼は他作の作家であった。心底から改革者であったエラスムスはいくつかの本を書いて、修道士の無知、聖職者（司祭）たちの迷信、そして当時の固執する

（狂信的な）低俗な宗教を暴いてヨーロッパを揺さぶったのである。しかし、彼の出版物の中の最高傑作はギリシャ語の新約聖書であった。約1,000年ぶりに新約聖書のギリシャ語テキスト（本文）に対して学問的関心が始めて払われたのであった。



エラスムスが彼のギリシャ語新約聖書を作る際、調べる写本は何百とあったこと、また彼はたびたび遠く、広く旅をしたので彼の研究に好都合であった。しかし、調べた結果彼は十分に証拠を検討し、ほんのわずかの代表的写本を用いたのであった。これらの写本は、新約聖書のギリシャ語写本の大半がそうであったように、公認本文のものであった。これは荒野の教会が使用し、大切に保存してきた同じ本文（テキスト）であった。これは偶然の一致ではなかった。神の摂理は、エラスムスのギリシャ語新約聖書の発行によって、大プロテスタント宗教改革において、ヨーロッパの3分の2がカトリック教会から分離する時に神の真の教会を導き、また後々の聖書翻訳の道備えをしていたのであった。



真理の灯火がこのように宗教改革運動に渡されていったとき、次々と公認本文に基づく翻訳ができていったのである。宗教改革の巨匠と言われているルターは、新約聖書のドイツ語翻訳を作るのにワルド派の聖書とエラスムスのギリシャ語底本を用いた。「オリヴェタンのフランス語訳、デオダテイスのイタリア語訳、またティンデルの英語訳も同じものを元に作られたのである。

その時期が来たとき、神の摂理は全世代の最高傑作としてある英語翻訳を生み出したのである。エラスムスのギリシャ語底本、いくつかのワルド派系統の聖書そしてティンデルの文学的優秀性を片手に、47人の学者たちによって1611年版の欽定訳聖書ができたのである。それは美しさといい、学問的にも他に比類のないものである。

欽定訳の翻訳者たちは顕著な学者たちであったうえに霊的にも誠実で清廉な人たちであった。この企画の総会長のランセロット・アンドリュースは彼の時代の最も優れた言語学者であった。毎日5時間は祈りに費やし、疑いなく、敬虔な信心深い人であった。普段横柄なジェームス王でさえ彼を非常に尊敬していたのである。み言葉の靈感を尊重していた。その上、聖書のどの部分に関しても一人の人が過度に影響を及ぼすことのないように監修されていた。作業の各部分が批評的に最低、14回は再検討（再吟味）されたのである。

マソラ本文を旧約聖書のテキスト・タイプとして、また公認本文を新約聖書として、翻訳の完成は、この国の父祖たちによってその聖書がアメリカに運ばれるのにちょうど間に合ったのである。実際、公認聖書（権利を授けられた、AUTHORIZED）となったのである。ジェームス王によって権威づけられたばかりでなくもっと重要なことは神の摂理の導きによってなされたということである。

公認本文は、初代教会の聖書であり、荒野の教会、宗教改革の教会、我が教会の先駆者達の聖書であった。それに従ったために多くの殉教者の血が流され、それに基づいて国々がたてられ、神の摂理がそれを守ってきたのである。

再臨運動



公認本文と批評本文の間に著しい対照が見られるが、近年になって、学界に於いては批評本文があがめられるようになってきた。RSV（改訂標準訳）の序論によると「今や我々はより多くの古い写本を持つようになった」ゆえに（たとえば、パチカン写本、シナイ写本）、我々はギリシャ語本文のオリジナル（原本）を復元することを容易にしている」とある。また、それによると、欽定訳のギリシャ語本文は「誤りによる損傷がある」と言っている。なぜ、高く評価されてきた公認訳についてこのような結論が出るのか不思議に思うかも知れない。そのわけを知るためには、歴史を100年さかのぼってみなければならない。

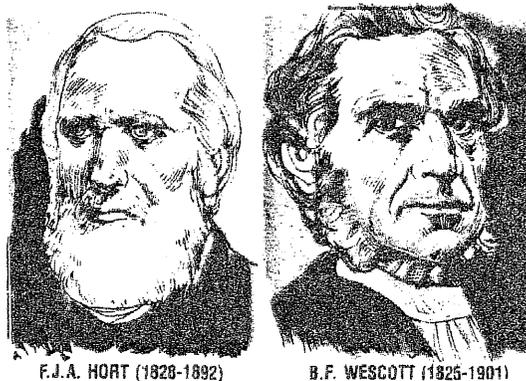
19世紀の後半は世界に多くの変化をもたらした。安息日や、三天使の使命のような大真理が宣伝されつつあった一方、心霊術、進化論やマルキシズム（共産主義）のような重大な誤りが起こりつつあった。このような偽りの運動が宇宙の創造者であられる神をこきおろそうとしているとき、近代批評学者たちは靈感の神の言葉としての評価を落とそうとされていた。人間は自分たちの「知性」を高め聖書を他の古典文学の一つのように取り扱った。これらの学者の第一人者がブルーク・フォス・ウエストコットとフェント・ジョン・アントニー・ホルトであった。

ウエストコットとホルトは、どちらともケンブリッジ大学の教授であり、本文批評の分野に於いては有名であった。彼らはプロテスタントではあったが、彼らの考え方の多くの点は明らかにカトリック的であった。彼らは処女マリヤを崇拜し、神と人間との間には仲保者として司祭が必要であると信じ、キリストの死によるあがないを否定した。更に、二人とも進化論に魅了されていた。しかし、ふたりを結んだ要因は公認本文に対する偏見による憎悪であった。ホルト博士はたった23才で、彼が公認本文のことを「極悪」「悪質」のもとと描写したときに、彼らは非正統派でありながら、彼らの学識はいろいろな現代訳特有の研究に大きな影響を与えたのである。

へとへとに疲れきった10年後、委員会は驚く一般人に、公認本文とは違う写本に基づく全く新しい翻訳に到達したことを公開した。1881年に出た改訳聖書は英語欽定訳の3、600近くの変更を行った。ギリシャ語には6、000近くの変更を行った。一般に聖書を公開する少し前にウエストコットとホルトは彼ら自身が編集したギリシャ語新約訳聖書を出版した。このギリシャ語の新約聖書はバチカン写本の写しとシナイ写本を元にしたものであり、それが実は、委員会がギリシャ語から英語に翻訳するときに使われたものであった。改訳委員会は新しい翻訳の基本としてウエストコットとホルトの考えを利用したことがはじめて明らかになった。

ウエストコットとホルトが秘密のうちに改訳委員会のメンバーに、彼らのギリシャ語新約聖書を配り、それと同時に写本を評価するときの新しい規則をも配っていたことは多くの人々に知られていなかった。委員会を支配して、彼らは新しい説を実に巧妙に提示したので、彼らに反対する者は知的でない者だと思わせた。委員会で使うため、多くのギリシャ語の写本が集められた。しかし、ウエストコットとホルトの規則（ルール）はあまりにもバチカン写本、シナイ写本を高く持ち上げたため、実際はそれらが、欽定訳を「改訳」する為の唯一の写本となった。

ウエストコット-ホルトの規則のもっとも欺瞞的な点は、最も古い写本がより正確な写本であると宣言したことである。バチカン写本、シナイ写本は公認本文を支持している現存する写本のどれよりも約100年古い。しかしながら、年は純粹さを保証しない。実際は最も初期のある写本は、非常に改悪されている。新約聖書が書き終えられてから次の世紀の間、写本は最も乱用されていた



F.J.A. HORT (1828-1892)

B.F. WESTCOTT (1825-1901)

を歴史は記録している。この時期に、いくつかの異端が起こり、改悪した聖書の写しがつくられていったことが知られている。パウロが生きていた時でさえ、ある者が偽りの写本を配っていた。(第二テサロニケ2:2)。バチカン写本とシナイ写本自体改悪されている証拠を見せている。公認本文を含んでいるギリシャ語の古い写本がない理由は、あまりにも明らかで学者たちはつい見のがしてしまうのである。聖書の手写しが本当にわずかしか手に入らなかった時には、それがすり減ってしまうほどよく使われていたのである。写本が世紀を通じて生き延びていたという事実は、それはほとんど使われていなかった、それが改悪されて腐敗した本文に外ならないからであった。

進化論の説のように、ウエストコットとホルトの説は、ミッシング・リンク（失われた環）※ の要素があった。彼らの説を受け入れさせるために、バチカン写本やシナイ写本に見られる批評本文でなく、多量の写本が公認本文を支持している理

※ （失われた環＝現生物としても化石としても発見されない仮想存在の生物、特にヒトと類人猿の間の）

由をまず説明しなければならなかった。さまざまな筆写人が時間も空間も離れ離れになって、そして独立して働いていながら、公認本文が一致するように彼らの写本をすべて「変える」ことをしていたのだと主張することは不合理なので、ウエストコットとホルトはある説を作り上げたのである。彼らは、4世紀にギリシャ語の本文（テキスト）はある標準化された、決められた型を採用するという公式の教権命令が発布されていたのだと説明したのである。彼らの言い分によると、このように伝播されたギリシャ語テキストは、多くの誤りを含んでいたというのである。この説がシリヤ校訂として知られるようになった。

しばらくの間、学者たちはその説を受け入れていたが、たちまちその誤りが暴露され、論破された。このようなギリシャ本文の公認改訳があつたことの歴史的証拠は全くないのである。このような説が真実であるとするれば、原本から200年しかたっていない人々が、どれが権威ある写本であるか見分けることができなかつたことになる。不思議なことに今日、原本から1900年もたった学者たちは、彼らよりもよりよい判断ができると思っているのである。パピルス学の草分けであり、また大英博物館の館長でもあつたフレデリック・ケニヨン卿は次のように言っている：

「この説は、今日の多くの近代批評の産物と同じように、全くでつちあげの錯覚を起こさせる巧妙な考えのムダな想像で、ちょうど内側から織りあげられた巧みな蜘蛛の巣が、明日は常識という無慈悲なホウキで一掃されてしまうようなものではないだろうか？（Our Bible and the Ancient Manuscript P173）。

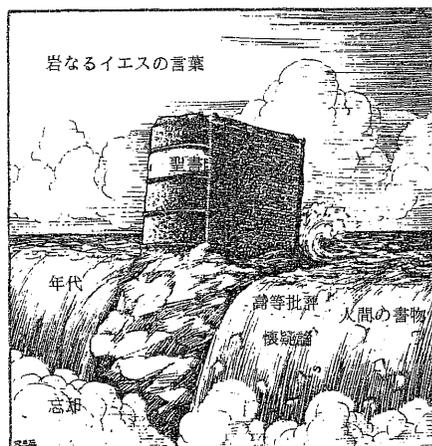
シリヤ校訂の説が失敗すると、ウエストコットとホルトの批評規則は共に崩れてしまうべきであつた。しかし、現代の学者たちは、公認本文の広がり神の摂理のみ手を認めるにはあまりにも高慢過ぎた。なぜ公認本文がギリシャ語写本として全世界に豊富に発見されるのかという適当な説明がなくとも、多くの学者たちはなおも批評本文とウエストコットとホルトのリベラル（自由主義的）な考えにしがみついている。ほとんどの現代訳だけでなく、無数の大学院の学生たちによって使われているギリシャ語新約聖書も批評本文に基づいているのである。

しかし、批評本文を支持する背後には、ただ人間の知性を自慢することにふけるという以上の強い動機がある。一般に受け入れられたギリシャ語本文に切り替えられたことによって、売上が伸びてきた。出版所は、次々出される度に最新の訳が未来の、大衆に受け入れられる聖書となり、利益と名声を上昇させる結果となるように望んでいるのである。幸いなことに、どれ一つとしてそのようなどん欲を満たす訳はないのである。

欽定訳は、英語を話すほとんどのクリスチャンに今なお最も信頼されている聖書である。いくらかの改善の余地が残されてはいるだろうが、どの訳よりもより忠実に靈感の啓示を保っている。聖書自体が他のどの訳よりも欽定訳を選ぶように導いている。それは教理の研究に有益であり、それは我々の信仰を強め、そしてそれは、何年も神によって守られてきたテキスト・タイプ（底本）—公認本文に基づいている。現代訳はある人たちにとっては読みやすいだろうが、1500年も前にキリスト教界によって拒否されたエジプトの本文である。そのような訳は参考文献と

として、また注解書としては有用であろう。しかし、欽定訳以上に権威を与えられてはならないものである。

我々がこの地上歴史の最終時代に立っている時、我々の信仰は神の言葉に強く立っていなければならない。我々は確信を持って導きを聖書に求め、他の人たちに救いの真理を提示できなければならない。教理的な真理を教えるのには欽定訳が最も良い。最後の時代の問題をこんなに説得力のあるように語っている聖書訳は他にない。他の訳の場合は今日的真理をあいまいなものにしているときも、欽定訳は明確に断言する。このような権威のある神の言葉の写しが産出したこと、また守られてきたことには確かに神の目的があるに違いない。神の言葉を研究するとき、我々一人一人が個人的に「神の言葉はとこしえに立つ」（イザヤ40：8）ことを確信したいものである。そしてただ知的にそのすばらしい真理を受け入れるだけでなく、毎日の生活に意味のある、ダイナミックなものとなるようにしたいものである。



参考文献：

F.C Cook, Revised Version of the First Three Gospels. London: John Murray, 1882.

David Otis Fuller, Which Bible? Michigan: Grand Rapids International Publications, 1981.

Edward F. Hills, The King James Version Defined. Iowa: Christian Research Press, 1984.

Sir Frederick Kenyon, Our Bible and the Ancient Manuscripts. New York: Thomas Nelson Publishers, 1980.

Ira Maurice Price, The Ancestry of Our English Bible. New York: Harper and Brothers, 1940.

Constantine Tischendorf, The Sinai and Comparative New Testament. New York: Ivison, Blakeman, Taylor, and Company, 1881.

Benjamin G. Wilkinson, Our Authorized Version Vindicated. Washington, D.C, 1930.

(翻訳：砂川優子)